

ケーススタディーの実施報告について

平成31年3月14日

1 ケーススタディーの全体概要

実施方針

- 対象地区:長野県長野市(旧中条村伊折地区)
- メンバー:集落住民、外部有識者1名(金沢大学林直樹准教授)、等
- 実施内容:計3回に渡りワークショップを開催し、持続的な利用が困難な土地の管理のあり方について、2019年とりまとめで示す予定の検討ステップの案に沿って検討し、地域で実際に検討を行う際に生じる課題を抽出する。

実施内容

- 第1回(1月20日(日)):
地域の将来を想像する
- 第2回(2月10日(日)):
将来も維持していきたい場所を描く
- 第3回(3月10日(日)):
将来的に維持できない場所について考える
地域の土地利用の方向性について考える

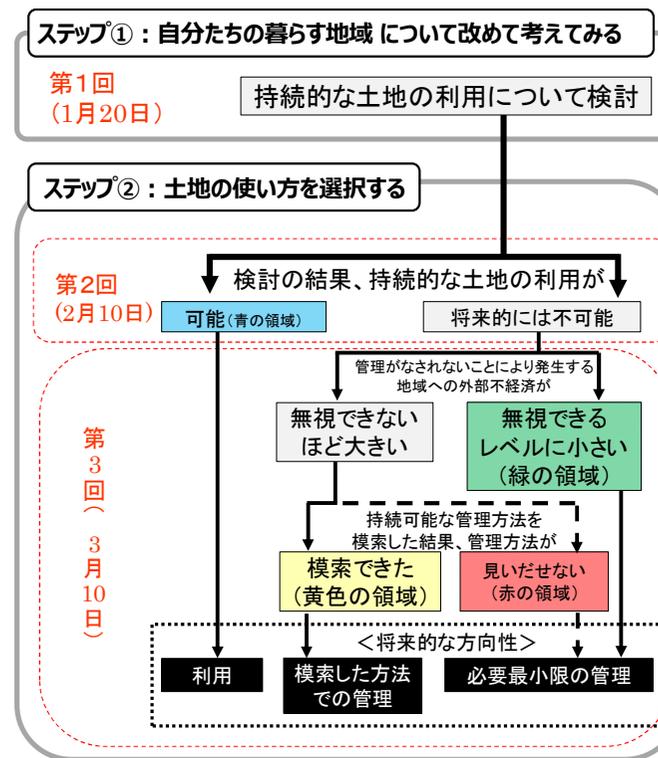


全体の会場の様子



グループ討議の様子

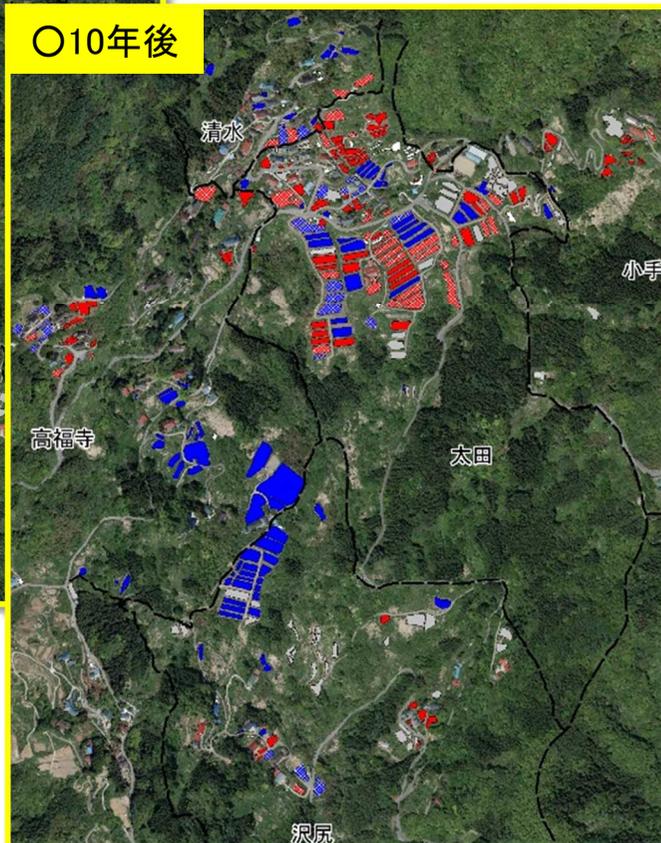
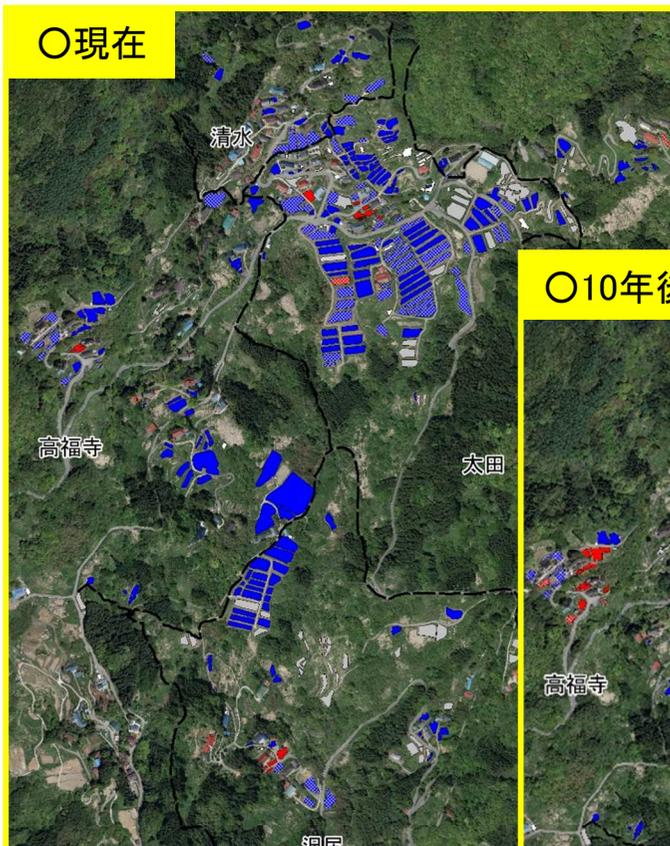
(参考)検討ステップ案との関係



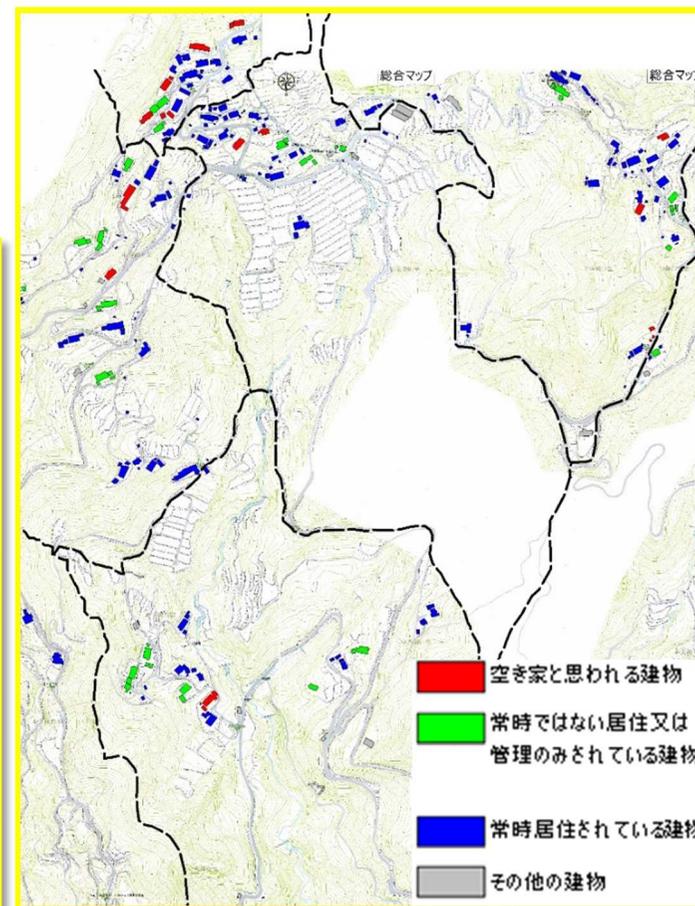
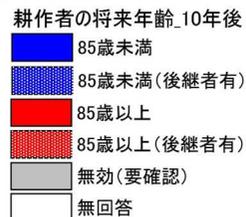
- 事前調査した情報から作成した農地の現況区分図を見て、情報の追加・修正を行った。
- 住宅地図から推定して作成した空き家の現況図を見て、情報の追加・修正を行った。

〈現在と10年後の農地の耕作者年齢及び後継者の有無〉

〈空き家の現況〉



下図：長野市総合マップ



下図：長野市総合マップ

- 再確認・再点検した図面等を見ながら、主な土地利用について、過去の様子やこれまでの変化、現在顕在化している課題や将来の懸念について、意見交換を行った。

〈主な意見〉

	過去	現在	未来
森林	<ul style="list-style-type: none"> 山に行っても<u>獣がいなかった。</u> 林業の衰退も大きい。 	<ul style="list-style-type: none"> 森林所有者が赤字で手入れをしない。 竹が沢山生えて大変。 木が生えて景色が見えなくなり残念。 クマが多く山に入れない。 	<ul style="list-style-type: none"> 森林が密集していて人が入りにくいだが、<u>間伐すれば美しく見え、山菜採りもできる。</u> 竹やぶの手が付けられなくなる可能性。 薪の需要が増える可能性。
農地	<ul style="list-style-type: none"> 農地だった場所に<u>スギが植林された。</u>今後の管理は難しい。 かつて田んぼ、畑等だった場所の多くが<u>自然に返った。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> 数年後には田畑はできない。 急斜面のため草刈りが大変。 畔の維持は棚田ならではの<u>大変さ。</u> 竹が生えると農地への影響が大きい。 桑畑だった場所は<u>ヨシが生えて木が生えず、荒れる。</u>スギが植えられた場所はまだまし。 イノシシに負けそう。 綺麗に管理するモチベーションを保つためにサクラを植えている。 	<ul style="list-style-type: none"> 野生鳥獣の棲家、動物園に。 田畑の森林化で家が囲まれて防犯上心配。 田沢沖の棚田は高福寺と沢尻の動線。<u>地域のつながりのために守る必要がある。</u> 栃倉の棚田は、<u>ほ場整備の合意形成に苦労した。</u>将来もなんとか守りたい。 ハゼ掛けが厳しい。<u>機械化が必要。</u> 手間がかからない山菜に期待。 道路沿いに無い農地は管理が困難。 定年帰農のニーズがある可能性。
宅地	<ul style="list-style-type: none"> 昭和53年に<u>小学校が廃校。</u> 集落の位置は<u>変わっていない。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> 空き家が朽ち果てており、切なくなる。 木が大きくなり集落や北アルプスが<u>見えにくくなった。</u> 移住希望者がいても貸し手がない。 10年～20年前は閉鎖的だったが、<u>人が減ってきて変わってきた。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> 家を貸すのは難しい。家が壊れた修理が家主では貸す人がいない。 未来は若者の移住者が<u>増える可能性。</u> 田舎の役員などを減らして、<u>移住者の負担を減らさないといけない。</u>

- これまでに収集・整理してきた各種情報等を重ね合わせた図面を見ながら、地域で守っていききたいもの(エリア)を地図上で把握し、それを守る上での課題などを整理・共有した。

〈主な意見〉

特に守りたい場所として挙げられた主なエリア(右下図の①~③に対応)

- ① 虫倉山の登山道、村を一望できる場所、観音様があるなど、観光資源でもあり、地域の心の拠り所。
- ② 栃倉の棚田(棚田100選)。棚田の風景は観光資源でもあり、地域の心の拠り所としても重要。
- ③ 田沢沖の棚田(棚田100選)。沢尻、高福寺の両集落の動線にあり、荒廃すると集落が分断される。

できる限り守りたい場所に関する意見

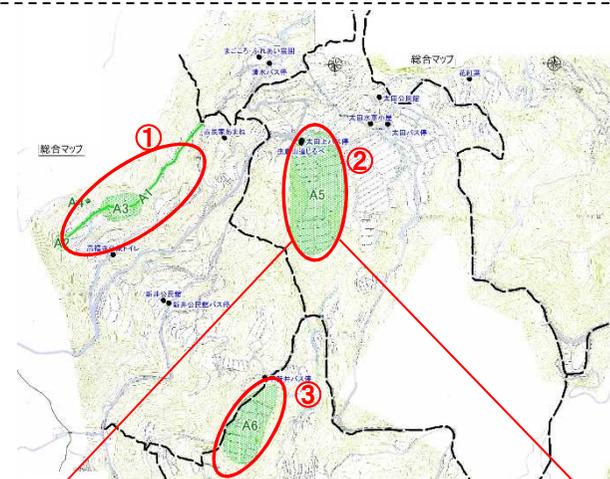
- 機械での営農が可能なところはできる限り残したい
- 集落はできる限り残したい

人手をかけることを諦めざるを得ない場所に関する意見

- 機械での営農が不可能で、後継者も見込めない農地等

守りたい場所で生じている課題に関する意見

- 10年後、20年後を想定すると、栃倉の棚田と田沢沖の棚田のみでも維持は不可能。外から縁者も含めて担い手を確保する必要がある。
- 集落営農の実施、コンバインの導入、畦畔の草刈りの軽減等により省力化を図る必要がある。
- ほとんどの農家は自家消費が中心。農協に出すのは手間がかかるうえに儲からない。販路があれば、どれだけでも作りたいという人もいるが、新たに付加価値を付けてコメを売り出す仕組みが必要。
- 電気柵が個人単位で設置されており、エリア全体では未対応。
- 居住者がいなくても管理されている家も多い。将来に向けて、空き家を世話してくれる人や、相談を受ける人が必要。



特に守りたい場所として挙げられた主なエリア(位置図)



長野市旧中条村伊折地区の栃倉の棚田(日本棚田100選)

- 将来的に利用していくことが難しい土地について、放置した場合に生じる悪影響について意見交換を行った。

〈主な意見〉

	放置した場合に生じる悪影響
森林	<ul style="list-style-type: none"> • スギの支障木があると<u>光が差さないために、凍結防止のために伐る必要がある。</u> • スギが<u>眺望を阻害している。お金にならないなら景観が悪いという理由だけでは伐れない。</u> • クマを寄せ付けないために<u>クマの餌になるナラの木を伐るべき。</u> • 道路沿いのサクラは守っていきたい。サクラがあると人が来る可能性。
農地	<ul style="list-style-type: none"> • 田沢沖の棚田は高福寺と沢尻の動線として守っていきたいが、<u>沢尻に住む人がいなくなれば動線として守る理由は無くなる。</u> • <u>今荒れている場所は鳥獣害の原因にはいるが、手の施しようがない。</u>電気柵で守った方が手っ取り早い。
宅地・その他	<ul style="list-style-type: none"> • <u>景観の良い空き家は売れる可能性がある。谷間で景観が悪い空き家は売れないかもしれない。</u> • 家を守るための草刈りが大変。<u>空き家の管理をやめると竹やぶにすぐにやられる。ただし、空き家は個人の持ち物であるから、他人が管理するのは難しい。</u> • <u>道路を維持するため周辺の草刈りは続ける必要。</u>

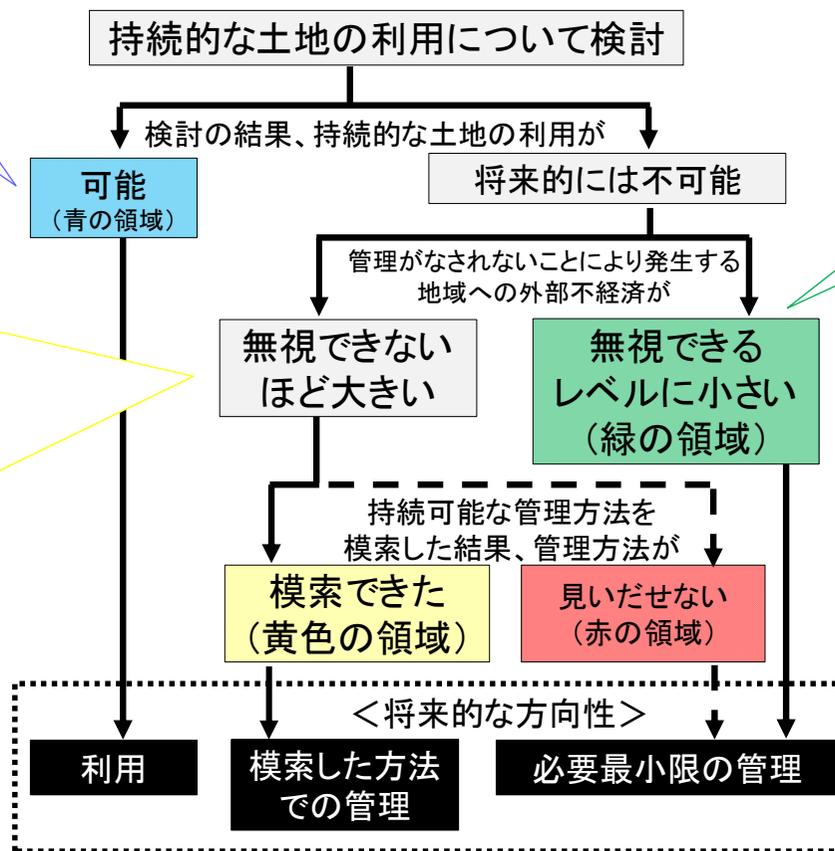
第3回ワークショップ②（地域の土地利用の方向性について考える）

- 第1回～第3回の議論を踏まえて、伊折地区の10年、20年先を見据えた土地利用構想について議論を行った。
- 土地利用構想は、フロー図に沿った下記の整理学で土地を三色に色塗りした地図を、グッドシナリオ、バッドシナリオの2種類に分けて作成した。
- 次のページ以降で、各班で作成した地図及び色塗りの考え方を示す。

持続的に利用する土地を、地図上で青色に塗る。

人手をかける管理のみを行う土地を、地図上で黄色に塗る。

※具体的な管理方法について掘り下げて議論を行っていないため、管理されないことにより発生する外部不経済が無視できないほど大きい土地は全て黄色に塗ることと整理した。

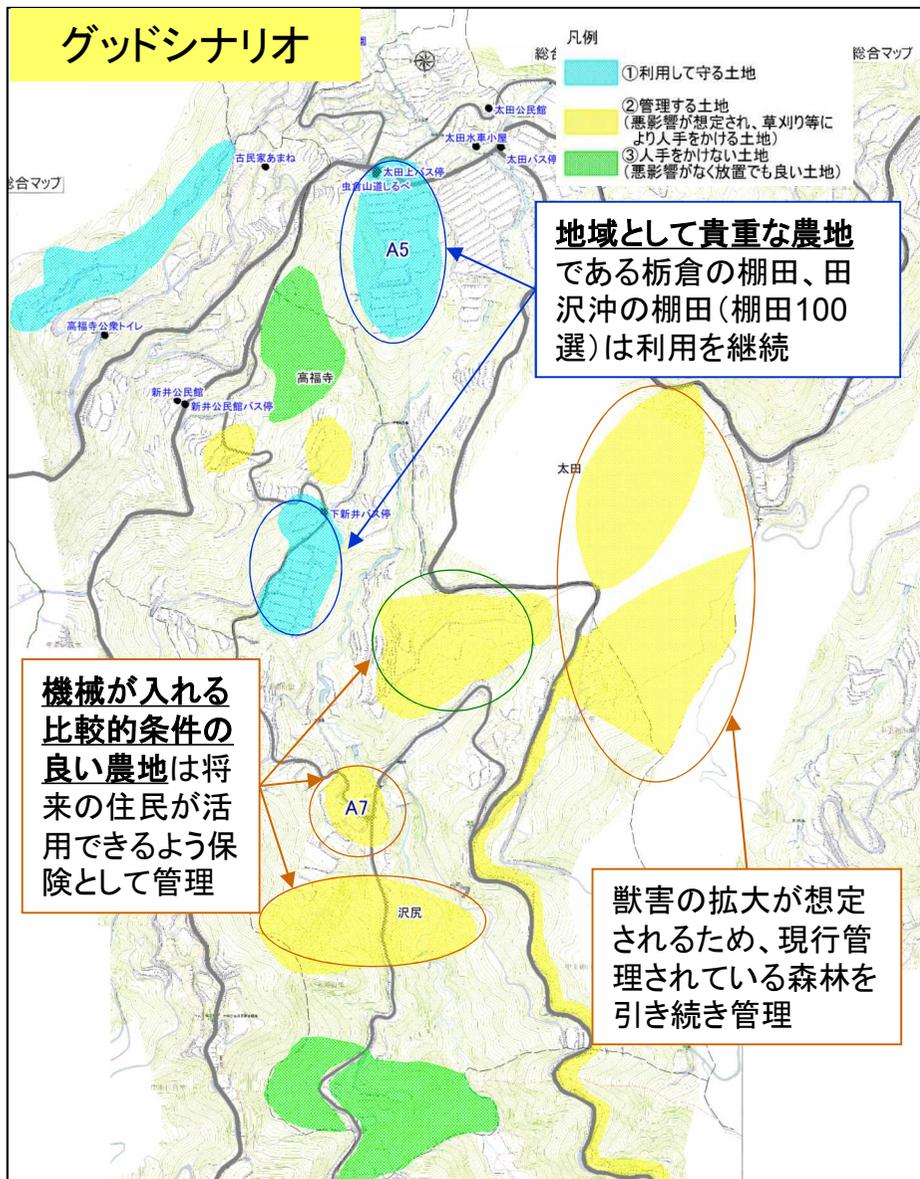


人手をかけないこととする土地を、地図上で緑色に塗る。

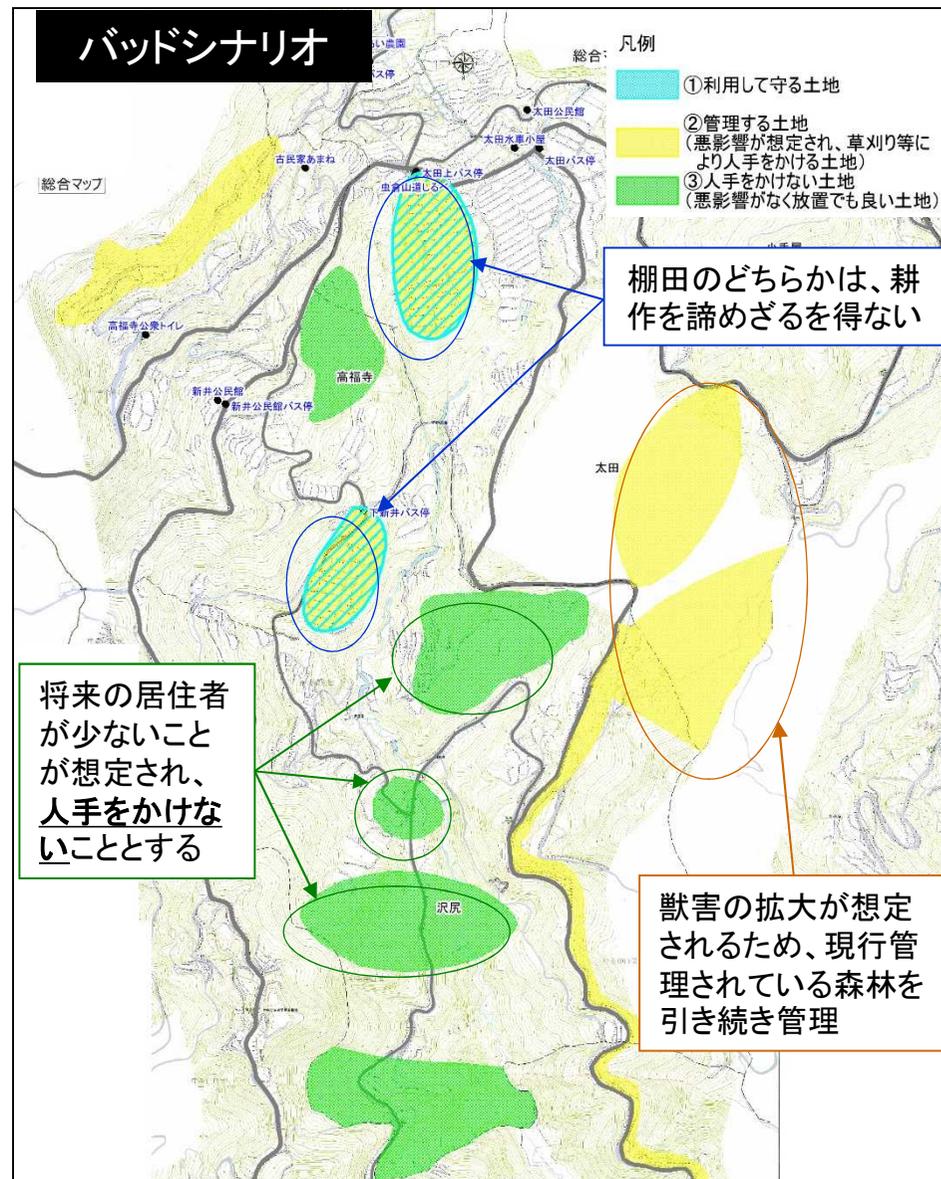
【グッドシナリオ】
新たな担い手が確保されることも念頭に置いたもの

【バッドシナリオ】
現時点で確実に想定される担い手だけを前提としたもの

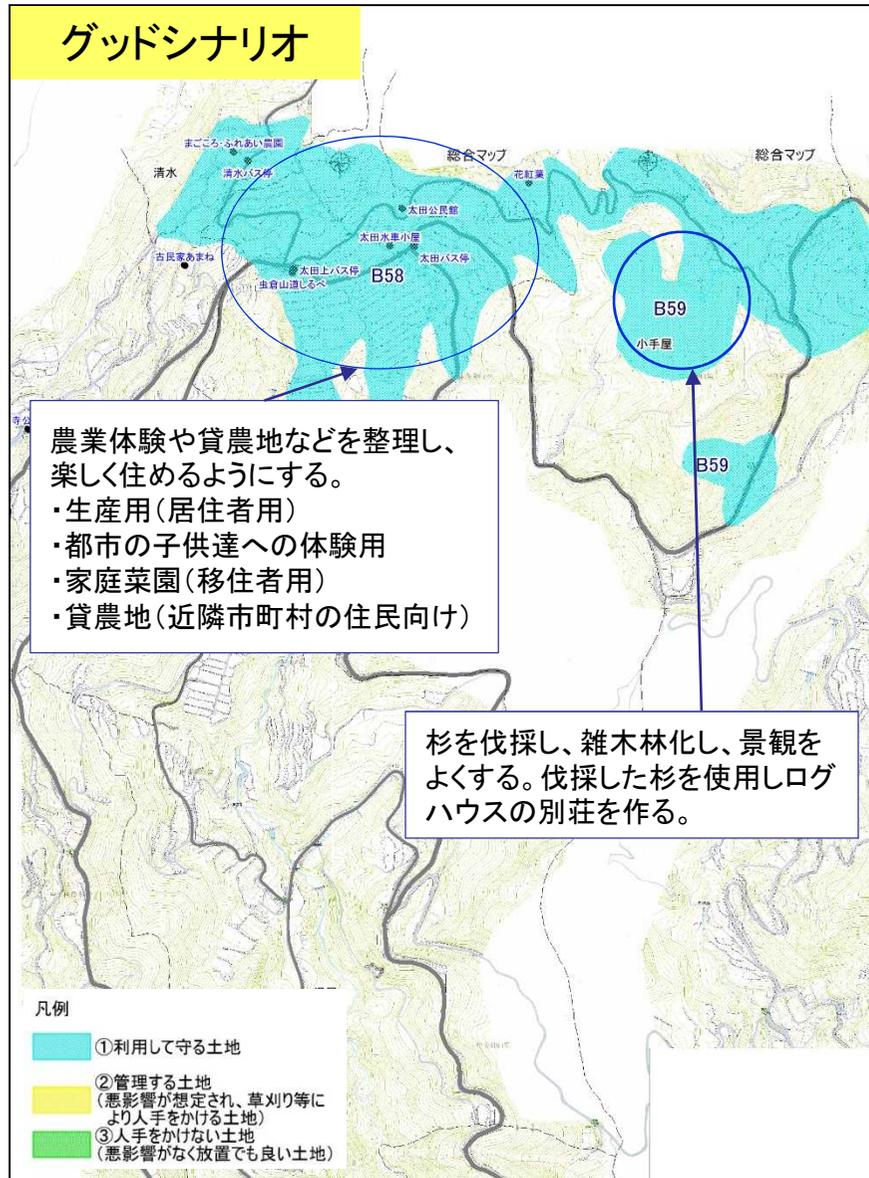
第3回ワークショップ③ (A班の土地利用構想(高福寺・沢尻地区))



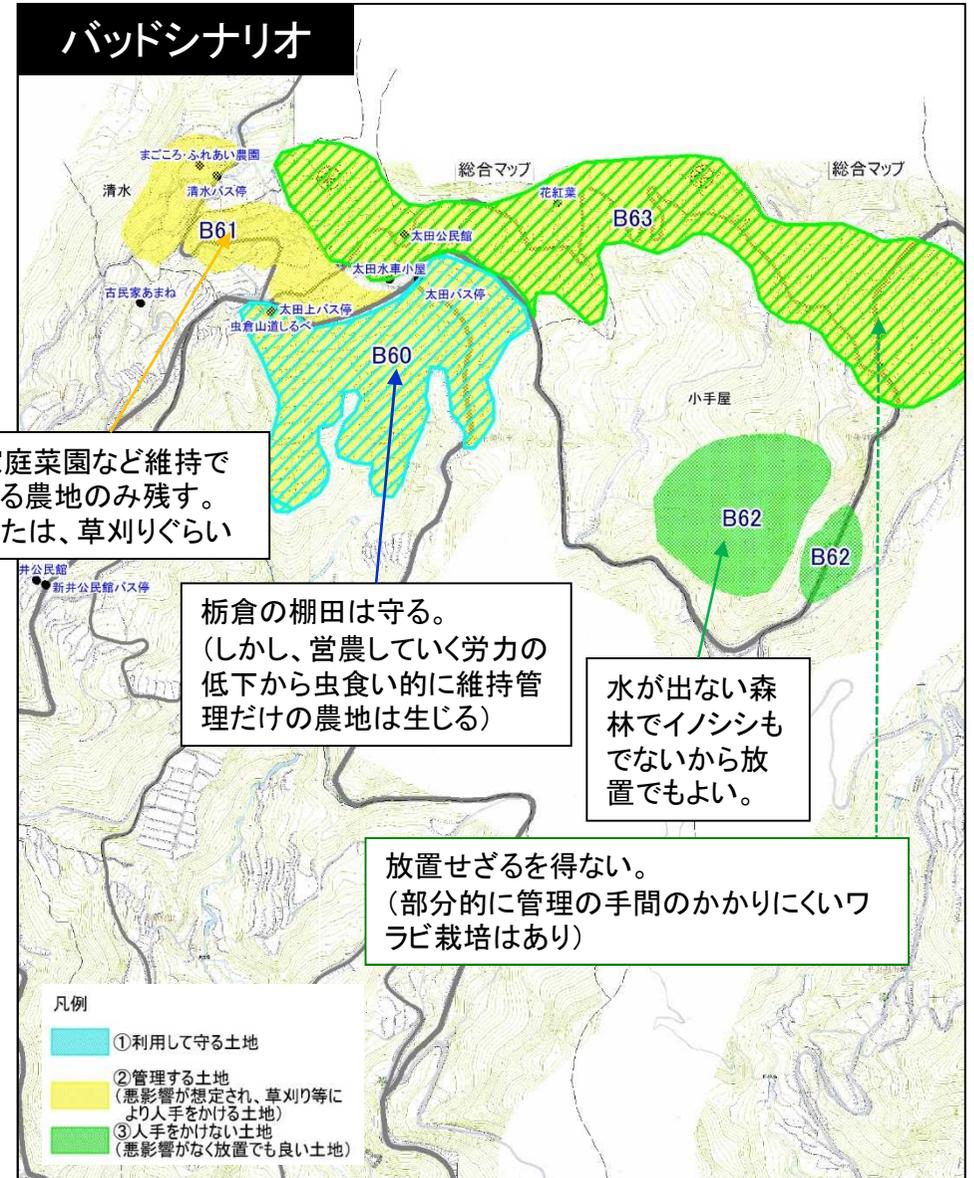
まだ決まっていない子供世代のUターンや移住者などを見込んだ想定(10年後:沢尻地区7世帯、高福寺地区9世帯)



移住者ゼロ、決まっていない子供世帯のUターンもゼロを想定(10年後:沢尻地区5世帯、高福寺地区7世帯)

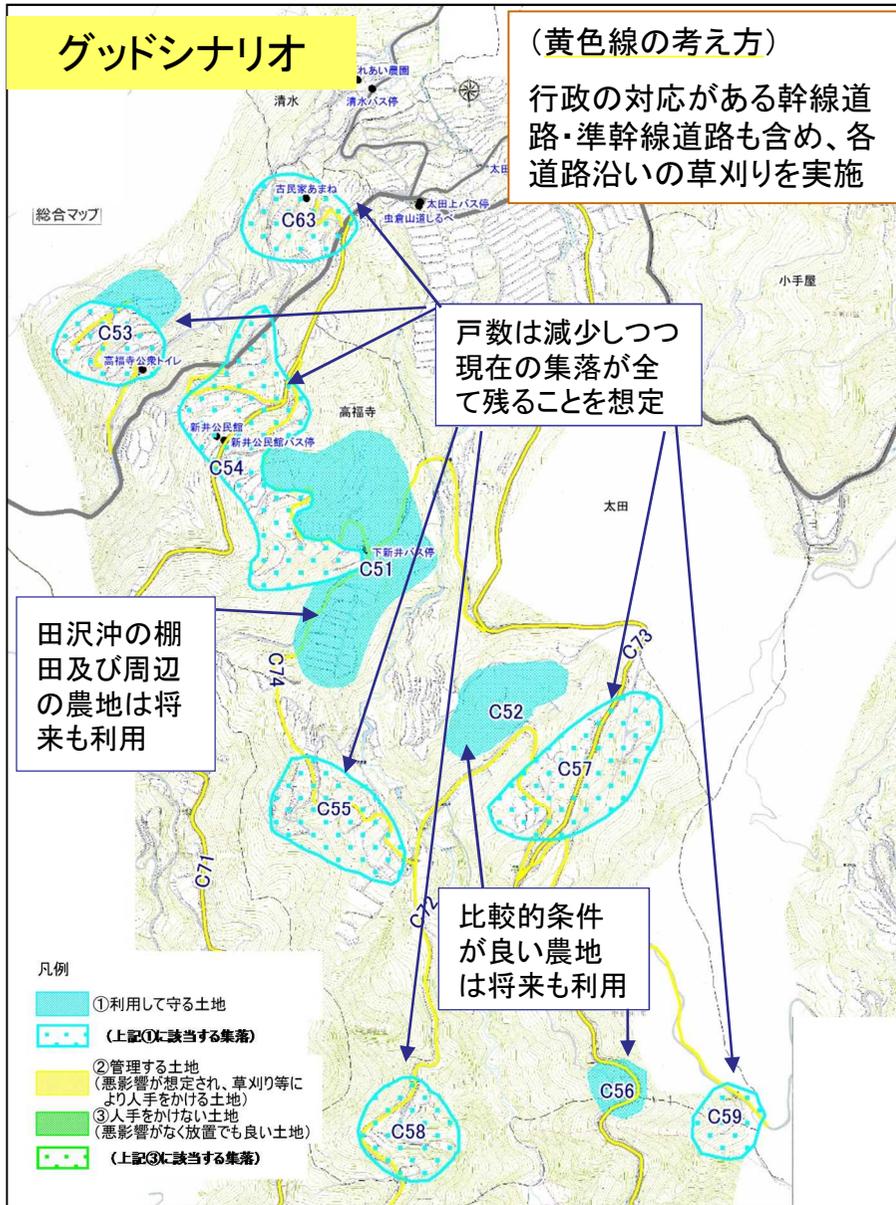


縁者や移住者など若い人がどんどん伊折地区に住むと見込んだ想定

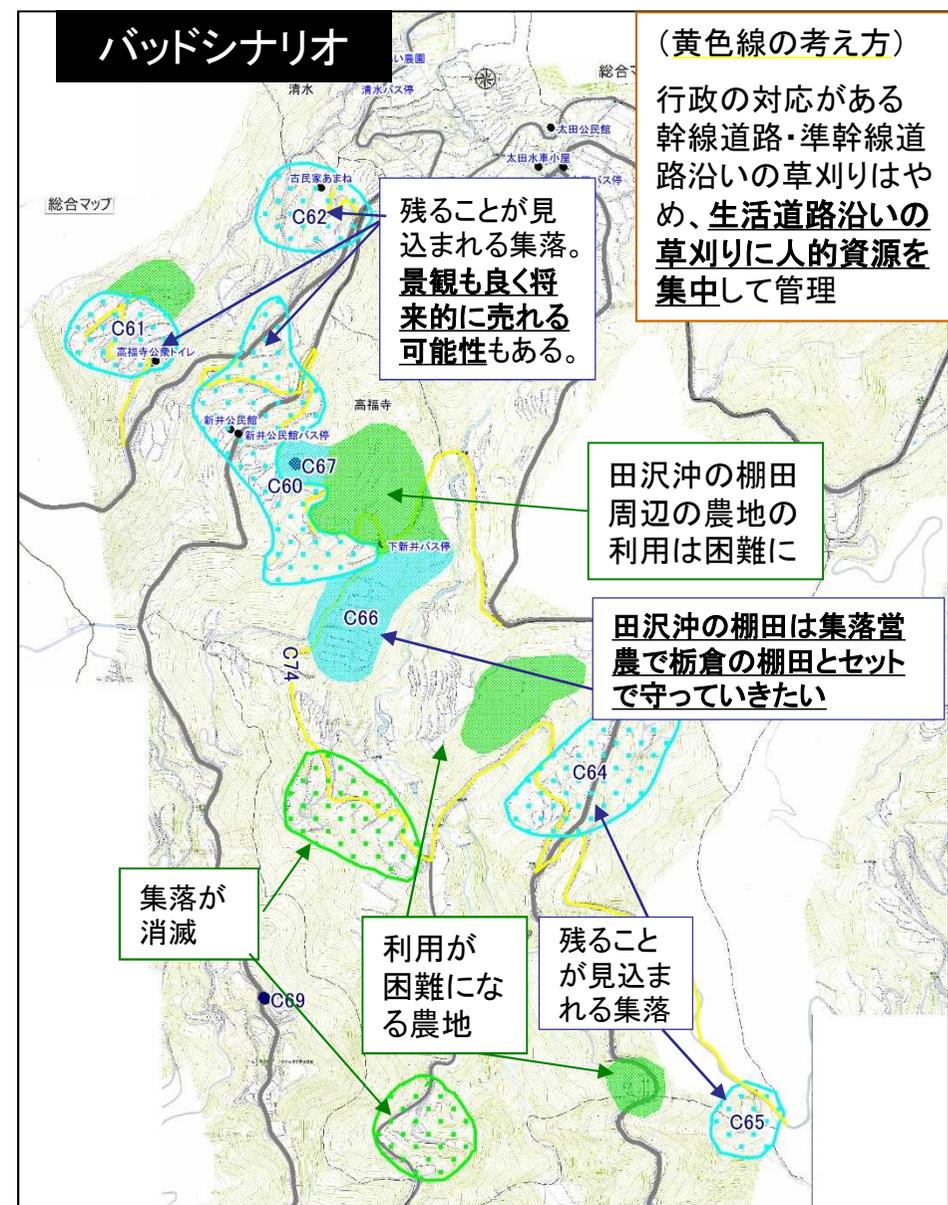


移住者ゼロであり、現状のまま将来を迎えることを想定

9 第3回ワークショップ⑤ (C班の土地利用構想(高福寺地区・沢尻地区))



できる限りの現状維持を想定



集落に残っている人が最も少なく、土地利用を支える地域外住民がいなくなることを想定

ワークショップで得られた知見

- 土地や担い手の現状及び将来の状況を把握し、地図上で共有することが、地域の現状と将来への危機感を共有する上で非常に有効
- 縁者等の地域外住民も含めた将来の担い手の人数を予測した上で持続的に利用していく土地を判断することが重要。
- 少ない人数及び負担で大きい面積を利用できる手法を地域で模索することができれば、より多くの土地を持続的に利用していくことができる可能性。
- 持続的な利用ができないと判断された土地の多くについて、必要最小限の管理でも問題ないとの意見が多かった。
- 一方で、5ページで示したように外部不経済を考慮して管理すべき土地についても、土地勘のある地域住民ならではの意見が出された。
- グッドシナリオ、バッドシナリオの2種類に分けた複数の将来図を描くことで、人手が最低限しか確保できない未来でも可能な土地の使い方について、掘り下げて議論することができた。

(参考) 検討ステップ案との関係

ステップ①：自分たちの暮らす地域について改めて考えてみる

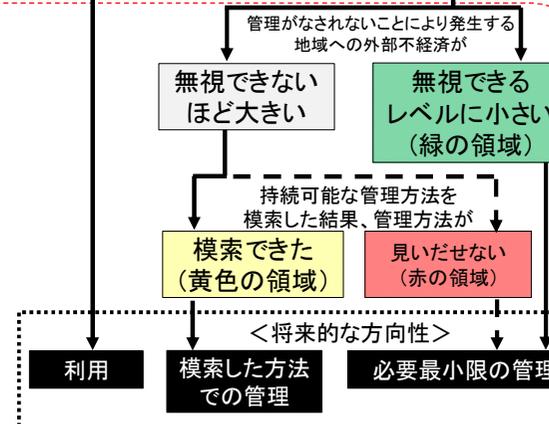
第1回
(1月20日)

持続的な土地の利用について検討

ステップ②：土地の使い方を選択する

第2回
(2月10日)

検討の結果、持続的な土地の利用が
 可能(青の領域) 将来的には不可能

第3回
(3月10日)

積み残しとなった点

- 土地利用構想の実現に向けた具体的なアクション
(2018年とりまとめで整理した「人(主体)」「土地」「仕組み」の視点も踏まえ、ワークショップで引き続き検討予定)
- 必要最小限の管理を行うと判断した土地に関する、広域的視点での評価
(評価の方法について、国土管理専門委員会で引き続き検討予定)